いのちと地域を守る

考える

生死分ける判断力養う

東日本大震災や昨年の関東・東北豪雨のような大災害では、安全な場所への避難など「次」の行動を瞬時に判断することが重要になる。とっさの選択が生死を分ける場合も少なくない。判断力を養う方法の一つに「クロスロード」＝用語＝というカードゲーム形式の防災教材がある。この教材を取り入れた研修を体験取材した。（武田俊郎）

■防災ゲーム「クロスロード」研修

「自分ならYESかNOか。その行動を選んだ理由も含めて考えてください」

4月11日、「災害シミュレーション演習」と題した研修が仙台市の泉区役所であった。対象は市が今春採用した新入職員1～11人。7人前後の班に分かれてクロスロードに取り組んだ。進行役の市地震防災アドバイザー針生勝広さん(49)が出す設問にYESかNOかを判断し、班ごとに意見を発表し合った。

【設問1】洪水の危険があるとして自宅にある川沿いの集落に避難勧告が出た。自宅には高齢の母と妻、小学生の子ども2人がいる。現在、深夜0時。外は大雨。今すぐ避難する？

仙台で記者参加

思わず「うーん」。考え込んだ末、記者が出した答えはNO。深夜で足元が暗い。しかも雨。移動は、けがなど危険が伴うと判断したからだ。

この設問にはメンバー全員がYESの班もあれば、意見が割れた班も。YESの主な理由は「洪水になれば孤立し、逃げ遅れる恐れがある」などだった。

もう一つ、記者が回答に迷った問いを紹介しよう。

【設問】地震で自宅が半壊した。3日分の水や食料が入った非常持ち出し袋を持って避難所に避難したが、周りには水も食料も持たない家族が多かった。この場で袋を開ける？

記者はやはり悩んだ末、YES。「半径3メートルくらいの周囲で分け合えば混乱しない」と考えた。この設問は意見が対立した班が多かった。「袋を開けて分け合う」というYES派と、「周囲でのトラブルになるから隠し持つ」などとするNO派に二分された。

ほかの設問は「避難所にペットを連れて行くか」「電車が止まり、徒歩で2、3時間かかるが出勤するか」など。研修が終わった今も答えに窮する問いが多かった。

参加者はゲームで手応えを得た様子。市営繕課の佐々木悠さん(25)は「まずは自分の身の安全を確保する重要性を認識した。同時に、職場や地域の中で自分がどんな責任を負う立場なのかで行動の選択も異なると感じた」と話した。

設問の解釈や付け加える条件によって、さまざまな回答や理由付けがあると実感した。針生さんは「あえてYES、NO両方の意見を自らの問題と捉え、いろんな意見や価値観を共有し、判断力を養ってほしい」と話す。

地域や職場で 日頃から訓練を

柔軟な発想 最も大事

クロスロードは何度か取材したが、実際に参加したのは初めてだった。設問に答える際、東日本大震災や昨年の関東・東北豪雨の記憶を何度も思い出し、手掛かりにした。

過去の被災体験は判断材料にはなった。その一方で、決定を下す際の迷いにもつながることを実感した。設問の現場が津波の恐れがある沿岸部か、崖崩れが起きそうな山沿いかなど、条件次第では正反対の回答になることもあった。

正解を求めることではなく、柔軟な判断力を鍛えることが最も大事だと、身をもって知った。

大切なのは「判断に迷う状況で最善の行動を考える」という習慣を日頃から積むことだ。地域や職場でもこうした訓練は有効だと思う。

用語 クロスロード　カードゲーム形式の防災教材。1995年の阪神大震災で災害対応に当たった神戸市職員へのインタビューに基づき、大学教員らが2004年に開発した。神戸編、一般編、市民編、要援護者編などがあり、一部は京大生協で販売している。

被災時の行動について考える「クロスロード」に取り組む記者（手前左）＝4月11日、仙台市泉区役所

深夜・大雨の避難 避難所にペット　多彩な価値観を共有

伝える

2011.3.11

■社屋1階で津波にのまれる（多賀城市）

慢心捨て、すぐ避難を

多賀城市の会社社長安住政之さん(61)は、県道仙台塩釜線（藤崎道路）に近い同市町前の社屋で津波に襲われた。逃げ遅れて1階で濁流にのまれたが、2階に逃げていた社員たちに引き上げられた。

安住政之さん

東日本大震災当日は会合で仙台にいました。車のラジオで津波警報を聞きましたが、多賀城に来ることはないと思っていました。

会社に着いて社員に段取りを指示し、店舗を回ろうと車を出した途端、ぶかぶかと車が流れてくるのが見えました。側溝のコンクリートのふたも、踊るように動いていました。

慌てて車を降りて会社にとって返し、机に飛び乗りましたが、水位はみるみるうちに上昇。あっという間に胸まで漬かりました。

社屋の1階には私一人。バリバリバリ、と仙台港から流れてきたコンテナや材木のぶつかる音が聞こえてきます。このままここにいてはまずいと感じました。

会社はレンタル業で、イベントや旅行の関連用品を扱っています。浮いてきたスーツケースをネクタイで結び、いかだ代わりにしようとしましたが、水圧でひっくり返されました。

背広は水を吸って重く、最悪の事態が頭をよぎります。ままよ、と力を振り絞って階段近くまで泳ぎ、2階から投げられたロープにつかまりました。

その後、求める声と励ます声が闇の中に響きました。「助けてください」。なじみの飲食店のおかみさんに見つかり、しかられました。

省みれば、震災の前年のチリ大地震津波と、2日前の三陸沖地震の津波警報が空振りしたことで、高をくくっていましたね。どうせ潮位変化くらいだろうと。

実家は真壁の近くで、地震の後に川底が見えたら逃げろと教えられていましたが、まさか多賀城の市街地まで浸水するとは想像もしていませんでした。

それ以来、自然を甘く見ず、いち早く逃げることを肝に銘じています。発電機や燃料の備蓄もしました。

会長を務める多賀城・七ケ浜商工会では各地から視察を受け入れています。震災の教訓を伝えるのが私の使命と考えています。

多賀城市内には、津波とともに仙台港からコンテナや材木が押し寄せた。2011年3月11日、多賀城市明月（河北新報震災アーカイブから）

くれ」「もう少しだ、頑張れ」「もうだめだ」。今も耳から離れません。

底冷えのする日でした。寒さをしのぐため、倉庫にあったパンダの着ぐるみで身を包みました。なりふり構ってはいられません。

翌朝、水が引いたので歩いて自宅に向かいました。あの状況下にパンダです。ふざけているように見えたのでしょう。

「なにおだってんの、この非常時に」。なじみの飲食店のおかみさんに見つかり、しかられました。

省みれば、震災の前年のチリ大地震津波と、2日前の三陸沖地震の津波警報が空振りしたことで、高をくくっていましたね。どうせ潮位変化くらいだろうと。

実家は真壁の近くで、地震の後に川底が見えたら逃げろと教えられていましたが、まさか多賀城の市街地まで浸水するとは想像もしていませんでした。

それ以来、自然を甘く見ず、いち早く逃げることを肝に銘じています。発電機や燃料の備蓄もしました。

会長を務める多賀城・七ケ浜商工会では各地から視察を受け入れています。震災の教訓を伝えるのが私の使命と考えています。

探る

■老朽化と震災 傷むインフラ

産官学連携 対策急げ

東北大大学院工学研究科教授
久田　真さん

2016年は東日本大震災から5年という節目の年であり、現在も復興事業が精力的に進められている。一方でこの5年間、わが国のインフラに警鐘を鳴らすような多くの出来事が発生した。

12年12月、山梨県の中央自動車道の笹子トンネルで天井板崩落事故が発生し、これを教訓として13年は社会資本のメンテナンス元年と位置付けられた。

国土交通省社会資本整備審議会道路部会は19年4月、「道路の老朽化対策の本格実施に関する提言」を公表したが、その内容は道路のインフラに警鐘を鳴らす「最後の警告」という強い論調であった。

同時期に総務省が公表した「公共施設等総合管理計画の策定要請」では、維持管理すべきインフラは道路や橋だけでなく、学校や病院、農業施設なども含めた全ての公共施設であることを改めて強調した。

「最後の警告」は、産官学それぞれが「しっかりと」連携して取り組むべきだと述べている。

特に、巨大な地震・津波（海水）の被害を受けたインフラは、傷みの程度が複雑になった。これらのインフラは、傷みの程度がどう変化していくのか、十分な注意を払う必要がある。

14年8月には、広島県で集中豪雨による大規模な土砂災害が発生。15年9月の集中豪雨では鬼怒川（茨城県）や渋井川（大崎市）の堤防が決壊し、16年4月には熊本で大きな地震が起こった。これらの災害は、わが国のインフラに関わる警鐘と捉えることができる。

東北地方の自治体は、震災からの復興事業のほか、老朽化しつつあるインフラの維持管理、その後の自然災害に対する復旧作業などを並行して進めなければならない状況にある。

特に、巨大な地震・津波（海水）の被害を受けたインフラは、傷みの程度が複雑になった。これらのインフラは、傷みの程度がどう変化していくのか、十分な注意を払う必要がある。

また、東北地方の厳しい寒冷地特有の気象作用が、インフラにもたらすダメージにも配慮が欠かせない。

さらに今後の少子高齢化を考えると、インフラを適切に維持管理するための財源や、担い手となる技術者をどのように確保していくかについても、しっかりと準備しておくべきだろう。

このような状況に対し、前述の「最後の警告」は、産官学それぞれがしっかりと連携して取り組むべきだと述べている。

将来の東北地方のインフラをいつまでも安全状態で安心して利用していくために、地域の理解を得ながら産官学の力を結集して取り組んでいくことが極めて重要である。

自主防災組織設立に重点

山形市防災対策課地域防災係長
秋葉義晴さん(46)

東日本大震災以降、各町内会における自主防災組織の設立に重点的に取り組んでいます。現在は全体の約8割に当たる441の町内会で組織され、2011年4月時点の295から大幅に増えました。

地域のリーダーとなる人材の不足など課題もありますが、2月に初めて、女性を対象にした防災研修会を開催したところ、想定していた80人を大幅に上回る約150人が集まりました。

いざという時のことは、体験してみないと分からない部分が多いと思います。市や自主防災組織が実施する防災訓練に、ぜひ参加してほしいです。

現場から

会場避難誘導 スムーズに

ベガルタ仙台運営課リーダー
片桐正幹さん(35)

サッカーJ1仙台の本拠地ユアテックスタジアム仙台（仙台市泉区）で試合中に災害が起きた場合、避難誘導をスムーズに行う役割を担っています。

東日本大震災の翌日はホームゲームが予定されていました。会場準備中に大きな揺れに遭い、落下物や破損の危険がある場所を把握できたことは良い経験になりました。

観客や選手ら最大約2万人の命を預かります。パニックになった観客が出口に殺到する事態をいかに避けるか。揺れが収まってから避難するという行動指針を守り、安心して観戦できるスタジアムを目指します。